



随想 韓国研修会

佐竹 弘靖 (ネットワーク情報学部教授)

1998 年 (平成 10) 年、私は長期在外研究員としてソウルにある檀国大学教育学部に 1 年間籍をおいた。留学以降、正式な大学訪問は今回が実に 15 年ぶりのことだ。

私が滞在了した 1998 年のちょうど 10 年前、第 24 回夏季オリンピック・ソウル大会を開催した韓国は、オリンピックを境にして高度成長の波に押し流されるかのように変貌し、私の滞在中にオリンピック以前の面影を探すのはとても難しいだろうと言われたものである。

あれから 15 年、スポーツ界はその間に 4 度のオリンピックを経験した。

韓国は、地元開催であったソウルオリンピックでは金 12、銀 10、銅 11、計 33 個のメダルを獲得し、総合 4 位の成績であった。日本は 14 位。その後、シドニー 12 位、アテネ 9 位、北京 7 位、ロンドン 5 位と着実にメダル獲得国上位に位置し続けている。それに比して日本は順に、15 位、5 位、8 位、11 位とアテネの飛躍以降下降線をたどっている。日本の危機感は看過できるものではないが、今回の大学訪問で、韓国の強さの秘密を再確認できるのではないかの期待を胸に旅路についた。

久しぶりの韓国

羽田空港からわずか 2 時間あまりで、金浦空港に到着した専修大学社会体育研究所所員一行は、専用バスでホテルのあるソウル市

内へ向かう。昼過ぎだというのに、冬の韓国独特の灰色にかすむ重たい空が広がっている。幸い雨は降っていない。窓際に座った私はガイドの説明をよそに、食い入るように車窓から景色を眺めながら思い出していた。

初めて韓国の地に降り立ち、ほとんど読めないハングルに圧倒されていた私を、空港まで迎えに来てくれていた檀国大学企画課国際交流課の方が笑顔で「アンニョンハセヨ」と握手してくれる。こちらも「アンニョンハセヨ」と覚えてた韓国語で返事をしたのはいいものの、その後は無言。会話ができないのである。ひたすら流れ去る窓越しの風景を眺めているしかない重苦しい時間だった。それだけに金浦空港から滞予定のホテルのあるソウル市内までの景色は、15 年たった今でも記憶から消え去ることはなかった。

冬の韓国は予想以上に寒い。一瞬にして曇ってしまう窓がそれを物語る。手で何度も拭いては当時の名残を探し当てようと見回すが、あまりにも様子が違いすぎてさっぱりわからない。まさに浦島太郎状態である。

バスはさほど混雑していない道路をスムーズに走っていく。正直もう少しゆっくり走ってくればよいのにと思いつつも、車の混雑や所狭しと立ち並ぶ 3、4 階建の真新しい店舗や遠くに霞む高層ビルが市内に近いことを教えてくれる。車も建物も綺麗だし近代的だ。10 年ひと昔というが、15 年もたっていれば当たり前前のことかもしれない。

崇実 (スンシル) 大学訪問

宿泊先であるコリアナホテルに到着した一行は、旅装を解く間もなく第一の訪問先である崇実 (スンシル) 大学へ向かう。なにせ 2 泊 3 日の強行軍。時間は有効に使わなければならない。

ホテルからおよそ 30 分、冬休み期間中で学生の姿は見かけないが、それだけに丸の内にたつビルを思わせるような近代的な校舎が強烈に目に飛び込んでくる。思わず見回してしまう。

一行は出迎えてくれた修士課程在学中の元ラガーマンの案内で、Entrepreneurship & Small Business Center 311 号室へ通された。

定員 200 名程の階段教室。壇上のスクリーン上には「崇実大学 国民生活体育研究所 / 専修大学 社会体育研究所合同研究会」の横断幕が掲げられている。

お互いのあいさつの後、さっそく研修会が始まる。具体的な内容は他の所員からの報告があるはずなので割愛させていただくが、崇実 (スンシル) 大学国民生活体育研究所所長のチョン・テジュン教授の「韓国におけるカレッジスポーツの現状」と「スポーツ IT」の講演内容からは、15 年前私が留学した際に見聞した韓国スポーツ界、あるいは大学スポーツ界がどれほど充実、発展してきたのかを実感させていただき、韓国の強さを再認識した瞬間であった。ただ、今回の研修で以前に留学した

檀国大学を訪問できていたならば、様変わりした韓国スポーツの姿をより鮮明に伝えられるのに・・・と残念がる自分がいたのも事実である。

気になった現実の大学スポーツ？

佐藤雅幸社会体育研究所所長の講演を聞いた後の質疑応答の時である。大学院修士課程でレジャー論を学んでいる女子学生から「日本のレジャー教育の実態と方向性」に関わる質問があった。

レジャー・レクリエーションを学生時代専攻していたこともあり、私が概略と現状を説明させてもらった後、座席に座っていた彼女の表情を伺うと胸に落ちないという不満げな雰囲気がありありである。はて、どうしたのだろうか？

しばし考えた。
ふと、頭に浮かんだのは「就職難」だ。

要するに、現在の日本と韓国の大学院、いやそこに籍を置く学生の状況が似てきているのではないかということだ。それは、大学スポーツを取り巻く社会環境のせいではないか？と。

日本では大学院博士課程を修了してもなかなか定職につけないのが現状である。まして修士課程ではその門は閉ざされたに近いも同然だ。どんなに優秀であっても空きがなければ採用の道は全くない。かといって、大学経営側からすれば施設に費用が掛かる体育・ス

ポーツを充実させることはやりたくても手が出せない。当然、その分野の教育に関わる教員にも制限がかかってくる。スポーツ立国を目指す日本は、理想と現実のギャップがまざれもなく大きい。

質問をした女子学生の本心はそこにあったのではないか。韓国での大学スポーツ界は分野によってはすでに就職難が生じているのではないか。それを肌で感じているがゆえに、彼女は日本の現状を知りたかったのではないだろうか。

ひょっとすると、彼女は佐藤雅幸先生はじめ我々訪問者一行への質問という場を借りて、チョン・テジュン所長を筆頭とする大学関係者に訴えたのでは？「私の将来はどうなっていくのでしょうか」。

韓国スポーツ界は冒頭でも述べたが、日本をはるかに凌ぐ強さを見せている。過去のオリンピックにおけるメダル数を見ただけでも明らかだ。しかし、それだけに、スポーツ強化と大学におけるスポーツ研究や教育に大きな溝ができてはいないか。それ故に社会も研究者や教育者に冷たい視線を浴びせかけているのではないか。

ひとつの研究課題が浮き彫りになった。
韓国の体育・スポーツを専攻する大学院生や学生たちの進路状況は？またそこから見えてくる今後の韓国スポーツ界の姿はどのようなものなのか？

今後取り組んでいこうと思う。

さいごに

平成 24 年度社会体育研究所研修会が平成 25 年 1 月 21 日から 23 日まで韓国で実施された。訪問先は崇実（スンシル）大学、韓国スポーツ科学研究所（KISS）、泰陵選手村であった。

私は「韓国スポーツ界、大学の変容」について報告するよう求められた。

そのため、崇実（スンシル）大学以外の 2 か所については他の所員の報告にまかせることにした。とはいえ、初めて訪問する大学であり、15 年前に一度でも訪ねていればその変化も具体的に論じられたかもしれない。しかし、私が籍を置いた大学ではなかったこともあり、比較検討することは非常に困難であった。したがって、思いつくまま、おりにふれて感じたことを記す随想というかたちにさせていただいた。ご了承願いたい。

今回の韓国訪問にあたりご尽力いただいた社会体育研究所の所員の方々、また我々の訪問を快く受け入れてくださった崇実（スンシル）大学、韓国スポーツ科学研究所（KISS）、泰陵選手村の関係者の皆様に、貴重な経験をさせていただくことに対し深く御礼申し上げます。